



Title	近代における九谷焼の動向 : 京焼との関係を中心に
Author(s)	前崎, 信也
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 62-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代における九谷焼の動向 — 京焼との関係を中心に —

前崎信也／京都女子大学

はじめに

輸出品の性格が強く、美術史で取り上げるに値する芸術的価値がないものであるかのように扱われてきた近代の日本陶磁器。それが、積極的な学術研究の対象となり始めたのは、2005年に東京国立博物館で開催された「世紀の祭典 万国博覧会の美術」展以降の事であろう。いわゆるジャポニズムの一翼として欧米の芸術の発展の契機となり、現代では再現できない高度な技術を駆使した作品は、今日までに日本美術史上で一定の評価を得るまでになった。

このような背景を踏まえ、明治・大正期の日本の陶磁器業に関する研究は、全国各地の産地が急速に進む産業の西洋化にいかに対応し、万国博覧会等を通じて海外進出に成功したかに注目が集まってきた。地域の地場産業振興を主たる目的とし、過去に海外で活躍した郷土の偉人が発掘され、地域の資料館・博物館で発信される。こうして全国の産地で同じようなストーリーが生産され続けてきたといえる。

他方、同時代に各地域がどのような関係性を築き、業界全体の中でどのような役割を果たしていたかについては、一部の例外を除きほとんど語られることはなかった。

古九谷論争と近代九谷焼研究

石川県南部の金沢市・小松市・加賀市・能美市で生産される磁器製品の総称が「九谷焼」である。17世紀、大聖寺藩領の九谷村で磁器の原料となる陶石が発見されたことからこの名があるとされている。黄・緑・青・紫の色釉薬で装飾された古九谷様式や、赤と金

で豪華な装飾を施した赤絵金彩の生産地として知られている。しかし、20世紀に入り「古九谷」の生産地をめぐる、いわゆる「古九谷論争」が繰り返されてきた。それにより、関連する研究の多くが「古九谷」やそれに関連する内容に費やされ、近代の九谷焼に対する研究は疎かになってきたと言わざるを得ない。この間、近代以降の九谷焼に関する資料の収集・保全は進まなかった。バブル期以降に陶磁器関連の産業が苦境に立たされる中、廃業した窯元・工場も多くあり、既に相当な量の資料が失われてしまったことだろう。

このような背景を踏まえ、本発表では近代に関する研究が進んでいる京焼との比較から、当時の日本の陶磁器業界全体における九谷焼の位置について検討する。そして、近代における九谷焼研究の端緒を開くことを目標に、優秀な職人輩出の地、意匠を凝らした高級色絵磁器の供給地、色絵技術とデザインの先進地としての九谷焼の存在に注目する。

九谷焼と京焼との関係

九谷焼の代表的な作風には「古九谷」「吉田屋」「飯田屋」「永楽」「木米」「庄三」と6種類あるとされている。このうち「永楽」とは京焼の陶工永楽和全（1823～96）にその端緒を認めることができる。和全は加賀大聖寺藩の招きにより、山代の九谷本窯で約5年間製陶の指導を行った。明代嘉靖期（1521～67）の金欄手を範とした豪華絢爛な赤絵金欄手を制作し、そのデザインがその後、九谷の代表的な作風のひとつとなった。

青木木米（1767～1833）も文化年間に金沢

の春日山窯で指導を行った。赤をほどこした上に五彩で人物を施す独特な作風は現在も「木米」と呼ばれている。九谷焼の代表的な2つの作風は、このように加賀に招聘された京焼の陶工にその起源をもつものなのである。

九谷焼に限らず、京焼の陶工は19世紀前半に各地で陶業の指導を行った。これには、当時、全国的に流行していた煎茶道具生産の中心が京都にあったことや、財政が困窮していた諸藩が産業としての陶磁器業に期待した殖産興業政策の一環といえることができる。永楽和全、青木木米の他にも、欽古堂亀祐（1765～1837）は三田焼、王子山焼、男山焼を、仁阿弥道八（1783～1855）は、偕楽園焼、讀窯等を、尾形周平（1788～1839）は東山焼、珉平焼を、そして初代清風與平（1803～1861）と初代宮川香山（1842～1916）は虫明焼を指導した。京・大阪という消費地に近く、最先端の意匠・技術に通じ、陶器・磁器のどちらも対応できる京焼陶工は、貴重な人材だったのである。つまり、江戸後期の京都は技術とデザインを、九谷を含めた多くの窯業地に輸出していたといえることができるだろう。

一方、九谷焼の京焼に対する役割とは、優秀な窯業技師や絵付師といった人材の供給にあったと言える。陶磁器を含む京都の美術工芸界には常に各地から優秀な人材が流入し、新陳代謝が促進されてきた。例えば、京焼の近代化を目的として1896年に五条坂に創設された京都市立陶磁器試験場の初代場長に抜擢されたのは、東京で最新の窯業技術を学んだ金沢出身の藤江永孝（1865～1915）であった。1917年、京都から3人目の帝室技芸員となった初代諏訪蘇山（1851～1922）も同様に金沢出身である。

九谷焼から京焼への人材の流入が顕著にみられるのが絵付の分野である。近世の九谷焼研究で知られる松本佐太郎はその著書の中で

以下のように記している。

「九谷の陶工で他府縣に行つて其法を傳へたものは頗る多く、中にも明治中期以降の名古屋、横濱、神戸の陶畫工の殆んど全部と、京都・今熊野の陶業振興地の陶工の大部分は九谷の陶工か其門派である。また紀州・岡崎・出石・信樂・有田・山形・會津・越前・越中・能登・北海道・伊賀・四日市・犬山・新發田・平戸・有田・鎌倉等の焼物に九谷の陶工が指導又は作業した數は甚だ多い、其他全國の上繪附ある陶産地へ多少とも九谷陶工の入り込まぬところはなく、之等の事實の上に私は加賀は、全國第一の陶工原産地であると言ふを憚りません。」（松本佐太郎『九谷陶磁史を中心に』古九谷研究会、1935年、p.104）

先で述べたように、現代においても九谷焼は細密な絵付の技術で知られる産地である。この松本の言葉を信じるのであれば、九谷焼は多くの優秀な人材を育成し、彼らを全国各地の窯業地に供給するという役割を持っていた。彼らが誇る色絵の代表的作風を手中に収めた職人であれば、国内向け・海外向けを問わず、あらゆる産地の絵付のスタイルに対応できたことであろう。全国各地で九谷出身の絵付師が活躍していたということを知るとは、産地の役割とは何かを考える上で、新たな鍵のひとつとなることだろう。

近代日本陶磁器の先行研究は産地ごとに個別に進められてきた。今後、それぞれの産地の関係性が明らかとなれば、新たな研究の可能性が広がるにちがいない。